

2022 年度後期 ものの見方・考え方講座 齊藤日出治

2022 年度前期 ものの見方・考え方講座

テーマ 近代市民社会の政治と社会闘争の課題

- 第 1 講 はじめに 関西生コン弾圧と市民社会の暴力 5 月 10 日
第 2 講 近代市民社会の暴力と政治 6 月 8 日
第 3 講 関西生コンの弾圧と広義の市民社会 7 月 13 日
第 4 講 関西生コンの弾圧とレイシズム 8 月 10 日

2022 年度後期 ものの見方・考え方講座

テーマ 資本主義を超えて—21 世紀の世界認識

- 第 1 講 社会的連帯経済が切り開く未来社会構想 10 月 12 日
—津田直則『資本主義を超える経済体制と文明』を読む
第 2 講 日本の企業社会と性差別—近代市民社会と生権力 11 月 9 日
第 3 講 近代市民社会と時間 1 時間と自己 12 月 14 日
第 4 講 近代市民社会と時間 2 加速する社会、速度の政治 1 月 11 日

第 3 講 近代市民社会と時間 1 時間と自己—こととしての時間

はじめに 近代における時間概念の転換

近代における時間概念—時間の加速—せわしなさ、時間がない、時間がほしい、という生活感覚—生活テンポの加速—技術革新は時間の節約と自由時間の増大につながらない
ルース・シュウォーツ・コーワン『お母さんは忙しくなるばかり』法政大学出版社



先近代の時間—神の時間 - 自己の生は神の時間に位置づけられる

ハルトムート・ローザ『加速する社会』227 頁

近代においては、「世界の時間と人生の時間(あるいは歴史と個人的な生の期間)とが離れ離れになる」

中世の時代においては、「固有の生の終焉」は、同時に「真の時間」の始まりを告げていた(固有の生は真の時間の中に埋め込まれている)が、近代になると、「いまや後者が色あせることによって、二つの時間地平がはっきりと分離した」228 頁

ブルーメンベルクの引用

自己の誕生から死にいたる生の期間が決定的に重要となり、真の「時間のなかの自分自身の滞在期間」という意識が遠のく。

「中世の人は、古くから続く世界の変わずに続く時間に自分の死を超えて加わっているということを確認した。・・心配をもたらすのは、最後に自分は永遠に罰せられるのか、永

遠の至福を手に入れるのかという問いだけであった」

「痕跡を残す試みによって、個々の生が影響を及ぼす時間はその生の持続期間をはるかに超えて延長され、世界の時間に少なくとも近づけられる。」 229 頁

↓

近代の時間 - 近代の新たな文化的ヘゲモニーの出現

「世界のさまざまな選択肢を加速して味わい尽くすことによって、つまり「より速い生」によって世界の時間と人生の時間との感覚は再び縮められうるという観念である」 → 良き生とは、自己の「生を最後の機会として捉えることに存する」＝世界の時間を人生の時間のなかに包摂しつくそうとする

「よき生とは満たされた生」であり、「世界が提供するものを可能な限り多く味わう」 229 頁

「体験の手段を濃縮して詰め込めば詰め込むほど、つまり濃縮するほど、内的生は豊かになる」＝「持つことの増大による存在の増大」 230 頁

「世界および主体のすべての可能性を最大限利用するという理念には、加速の原理が備わる」 230 頁

→ かぎりない時間の加速化、生活テンポの上昇

↓

近代の時間とは自己を外から規制する客観的で外的な規範ではなく、自己とともにあり、自己とともに生まれる＝自己の存在は時間と不可分、時間は自己に先立って自存するものではなく、自己とともに生まれる。

木村敏『時間と自己』中公新書、1982年

過去から未来へと直線的に流れる時間の成立は、個人の生と死が集団の生と死から区別されたときに生まれてくる 169 頁

自然と自己が一体となった原始状態—「万物はいまあるままの姿で無限に反復される永劫回帰の純粹持続」＝「以前と以後の方向も、過去と未来の区別も、時間の不可逆性の観念も知らぬような時間」

↓

「個人が自己の一回限りの生と死を集団全体の生と死から区別することを学び、名前と職分を与えられて個人間の差異が自覚されるようになったとき、そこに未来と過去の観念が生れ、以前と以後の不可逆的な方向づけが始まる」 169 頁

墓じまい・葬儀の多様化と自己の時間

第1部 こととしての時間—<ものの問い>から<ことの問い>へ

われわれはものの世界に生きている。自己から離れて、時間というもの、速さというものがある、と考える

見る—美しい景色に夢中になる＝ものを忘れた世界 → 我に返る＝ものを距離を置い

てみる → 西欧科学はものを客観的に見る＝テオリア(観想) 6頁

→ 世界を客観的にみる、ということに辞めてみる 7頁 → ことの世界の出現

「私がここにいるということ、私の前に机や原稿用紙があるということ、いま私がある上に字を書いているということ」 8頁—メルロー・ポンティの身体論

リンゴが木から落ちること＝木から落ちるリンゴとそれを経験している主観の双方を含んだ命題 10頁

「落ちるといふ経験は・・・客観と主観のあいだにある」 10頁

ただし、ことは言葉によって語られるほかない 事＝言 → 言葉によってことが語られたとたんに、ことはものになる。 言葉はことの表層しかとらえない

↓

時間とは何か

われわれが通常考えている時間は<ものとしての時間>—時計やカレンダーではかられる時間＝「もの的に対象化された時間」 19頁

1) こととしての時間

—わたしというものは時間の中にあるのに対して、わたしということは時間とともにある。こととしてのわたしが失われた状態—離人症＝「外界の事物や自分自身の身体についての実在感や現実感、充実感、重量感、自己所属感などといった感覚が失われる」 26頁

＝「自分がここにいるのだということがわからない」 26頁

離人症患者の時間体験—「時間がぼろぼろになってしまって、・・・てんでばらばらでつながりのない無数のいまが、いま、いま、いま、とむちゃくちゃに出てくる」 27頁

時刻を読み取り、今何時かをいうことはできるが、「いまの印象と次の印象とを時間という観点で結びつけることができない」 28頁

＝「あいだとしてのいま」が成立しなくなってしまった状態

ことによって構成されているいまは、「豊かな広がりとしてのいま」であって、「未来と過去のあいだに切れ目を作らない」 29頁

いまとは「未来と過去のあいだ」のこと、未来と過去がまずあって、そのあいだに今が挟み込まれているのではない。「あいだとしてのいまが、未来と過去を創り出すのである。こととしてのいまは、こうした時間の流れ全体の源泉となる。」

ものとしての客観的時間、流れる時間は、「あいだとしてのいま」 30頁ということの感覚から生まれてくる。

「時間が未来から過去へと連続的に流れるというわれわれの体験は、むしろいまの豊かなひろがり、いまからいままでの両方向への極性を持ちながら、われわれのもとにとどまっていることから生まれる。」 30頁

→ 離人症患者は、時間と自己を共に失っている。

↓

このような広がりをもってとどまる時間において私は私になる。
「時間とは要するにわれわれ自身、私自身のこと」 52 頁

↓

離人症とは、「私の不成立、いまの不成立」 54 頁

2) 共同的自己、社会的自己—他者との関係において存在する自己

→ 時間は自己と他者の関係を媒介する—「制度的時間」「公共の時間」
太陽の動き、鳥の鳴き声、動物の習性を目安に農作業を開始したり、祭りを開催する。 57 頁
「生きられる共時性」 58 頁

こととも—生成と存在 ルカーチ『歴史と階級意識』の物象化=モノになること
マーク・フィッシャー『ポスト資本主義の欲望』左右社

第2部 時間と精神病理

1 「分裂病者」の時間

—精神病理的事態における時間体験

「分裂症患者」の「自己性の不確かさ」

「自分というものから一刻も目を話すことができない」

「いつも気を張っていないと、他人がどんどん私の中に入って来て、私というものがなくなってしまう」 71 頁

「先手先手の防御的姿勢」 71 頁

「いつも未来を先取りしながら、現在よりも一歩先を生きようとしている」 72 頁

↓

「現在の自己に対して否定的な態度を取る」 72 頁 → 「現状否定と未来希望」 73 頁

「苦痛と絶望の場にすぎない現在からの離脱の試み」 74 頁

= 自己の自己性の喪失 → 「自己性が奪われ、他者化されている」 76 頁

「自己自身による自己認知」の不可能性の状態 77 頁

分裂症患者は、「つねに未来を先取りし、現在よりも一歩先を読もうとしている。・・分裂症患者は…事態がまだ現前していないということに恐怖と憧憬を抱く」=すでに現前している事態に対する驚くべき無関心

「未来先取的なあり方」=アンテ・フェストゥムの=「祭りの前」「前夜祭的」 87 頁

= 「今までそのようになり続けてきた自己の積み重ねとしての現在を・・自己実現の根拠として引き受けることができない」 90 頁

「運命を読み間違えた。やはり東京の大学へ行くべきだった」 90 頁

= 「自己の存在を過去にさかのぼって根本から変更したいという願望」 90 頁

=アンテ・フェストゥムの

↓

自己性が他者性にとって代えられる—自分が書いている気がしない

「反自己的な未知性をおびた他者性」 92 頁

「自己自身が自己にとって未知の他者性をおび」る。 92 頁

↓

未知の絶対的な他者性とは死のこと → 死によって自己の有限な生が徹底的に無化される = 「分裂症者のアンテ・フェストゥム的な絶望」 93 頁

↓

死という他者性にとらえられた有限の自己の生が、いままでとこれからの区別をあたえ、それが時間の流れとなる、

— われわれが自己とか時間とか呼んでいるものは、「われわれ人間が死すべきものであるという有限性の反映であるにすぎない」 95 頁

時間とか自己というものは、「われわれの死とのかかわりかたの様態にすぎない」 95 頁

「分裂症者」は、そのような様態で(死によって自己が無化されたという様態で)「死とかかわっている人のこと」 95 頁

BTS Answer Love Myself

「今、僕のために歩みだすことは間違いなく/僕のための行い

ぼくのための振舞い それが/僕のための幸せ

なぜ隠そうとばかりするのか/その仮面の下に

失敗で出来た傷跡までもが/全部自分という星座の一部なのに

僕の呼吸 歩いてきた道/その全てで答えるよ

昨日の僕 今日の僕、明日の僕/僕は自分の愛し方をわかり始めてる

余すところなく 残らずすべて/みんな含めて僕なんだ」

「BTS と論語」君子は過ちをあらたむる

波津博明『フラタニティ』2022年12月号

個人の人生—星座=世界時間 → 昨日・今日・明日の自分を愛する → 自己の全否定としての統合失調症

→ 現代の社会的な病理現象としての統合失調症

2 鬱病者の時間

鬱病—「気持ち沈む」「気力が出ない」「いらいらして落ち着かない焦燥感や不安感」

「罪責妄想」(償い難い罪を犯したという意識)

「心気妄想」(不治の病気にかかってしまった)

「貧困妄想」(家庭の経済状態が回復不能な打撃をあたえられた)103 頁

＝「取り返しのつかぬことになった」＝「メランコリー親和型」103 頁
＝「秩序愛好性」＝「几帳面」—「独特の仕方では秩序の中にはまり込んでしまっていて、そこから抜け出せない」104 頁
＝「みずからを秩序の中に閉じ込める」106 頁
→「いつも自己自身におくれをとらないように、負い目を負わないように」けなげに努力する 107 頁
＝「住み慣れた秩序の外に出ないでおく」＝ポスト・フェストゥム＝「祭りのあと」「あとのまつり」
時間と自己の不可分性—いままでの自己とこれからの自己との関係のありかたが時間を生み出す
1) 分裂症—「いままでの自己に対しては否定的に働いて、新しい自己の生成を促す」
＝アンテ・フェストゥム
過去、現在、未来のすべてが「果たされなかった夢」で、「その間に歴史の歩みはない」
＝「時間が停止している」109 頁
鬱病—「いままでの自己を基礎に置いた自己実現の場としての招来的な未来」をとらえる 109 頁＝ポスト・フェストゥム
未知なる未来はない＝「未来とはこれまでのつつがない延長」110 頁
未来は「現在完了」でしかない
→「所有の喪失」＝「職場や、住み慣れた家や、家族の一員や、献身的な奉仕の対象など、さまざまなものの喪失」＝「鬱病を誘発する状況というのは、現在完了の時制を構成しているような所有の契機が喪失したとき」111 頁

3 祝祭の精神病理

西欧文明社会＝近代社会に住む個人の自己とのかかわり、世界や他者とのかかわりの 2 つの局限的な形態

1) 「分裂症」—「未知なる未来における自己の可能性の追求」

2) 鬱病—「既知の慣習や経験への保守的な埋没」 133 頁

1)と2)は、ともに「水平方向での日常性の危機」134 頁

3) もうひとつの非日常性＝「第三の狂気」134 頁

「日常性の存立の基盤それ自体が解体するという形で顕現する非日常性」134 頁

＝「垂直方向での日常性の危機」

「第三の狂気というのは、分裂病者でも鬱病者でも、そして常時は健康で正常な人でも、なんらかの事情によって意識が解体した場合には、ひとしく経験しうるような普遍的な非理性なのである」158 頁

「愛の恍惚、死との直面、自然の一体感、宗教や芸術の世界における超越性の体験、災害や旅における日常性からの離脱、呪術的な感応」134 頁

↓

「急性錯乱状態」＝「分裂症」、そううつ病などすべての精神病に見られると同時に、「癲癇発作症状」において顕現する状態 134 頁

癲癇＝「不意を襲う、ひっ捕える」ギリシャ語 141 頁

＝「尋常でないよう自然的な力の介入」「超現実的な威力の顕現」141 頁

「日常の時間は発作中に停止して、無時間の空白が忽然として出現する」142 頁

「癲癇の発作においては、環界との相即関係を保障している時間の連続性が唐突に中断され、短時間ののちに再び回復される。これは主体にとって重大な転機であり、存続の危機である。」143 頁

＝「一種の高揚感」－「時間の中に永遠が稲妻のように侵入してくる。永遠は彼岸的なものとしてではなく、現世的生の真只中で生きられるものとして姿を現す。癲癇発作は、生の只中での死の顕現である」143 頁

それは「個別的生命の終焉としての個別的な死ではない。それは、いかなる個別的生もそこから生まれそこへ向かって死んで行く、個別の生死を超えた一つの次元である。」

大多数の癲癇患者は、永遠という死の無限性を意識的に体験することができないが、「意識の完全な消失の前に数秒間のアウラ体験を有する」144 頁

転換患者であったある偉大な作家が、このアウラ体験を克明に再現してくれた。

アウラ＝息、風のそよぎ、「癲癇発作の前兆」

ドストエフスキー

『白痴』

「憂愁と精神的暗黒と圧迫を破って、ふいに脳髓がぱっと焔でも上げるように活動し、ありとあらゆる生の力が一時にもすごい勢いで緊張する。生の直覚や自己意識はほとんど十倍の力を増してくる。が、それはほんの一転瞬の間で、たちまち稲妻のごとくに過ぎてしまうのだ」145 頁

『悪霊』

「ある数秒間があるのだ、・・・そのとき忽然として、完全に獲得されたる永久調和の存在を、直感するのだ。・・・まるで、とつぜん全宇宙を直観して、『しかり、そは正し』と言ったような』心持なんだ。・・・ぼくはこの五秒間に一つの生をいきるのだ。そのためには、一生を投げ出しても惜しくはない。それだけの価値があるんだからね！」145－146 頁

それは「死刑執行直前の死刑囚の体験とも酷似している」146 頁

それは、「生から死への参入の体験というよりは、むしろ死の世界へと一歩足を踏み入れた人が、死の側から生を見ている体験だといってもよいだろう」147 頁

Cf.堀田善衛『時間』「お父さん、きれいだね！」

「非日常性の側から日常性の世界を見ている光景」＝「日常の生の世界とはまったく別種の、それとは絶対に比量しえない『時間』が支配していて、この別種の『時間』の相のもとに生が照らし出された姿が、アウラ体験なのである。」147 頁

未来永劫という表象が観念ではなく、「現在の直接的体験として」「実感を伴ってわれわれに直接現前する」147 頁

時間の発生の根源がそのとき照らし出される。以前と以後、いままでといまから、過去と未来という2つの方向に分極し、流れるものとして意識される時間は。「いまを意識しているわれわれの個別的生命の有限性のためである」147 頁

「癲癇患者がそのアウラ体験の中で生きている時間は、そのような意味で、過去と未来をもたぬ純粋な現在だといってよい」148 頁

= 「現在の優位」148 頁

「ドストエフスキーの意識における現在のこの豊かさは、彼がアウラ体験において死の側から生を眺めたときの壮麗な光景と、どこかで深くつながっている」151 頁

ヴィリリオが加速が急進展し、瞬間移動が行われる世界は、時間の停止状態を生み出すという事象は、癲癇発作における過去と未来が消失した「純粋な現在」の状態ではないのか。「超高速停止」の状態とは、癲癇患者のアウラ体験を世界のすべてのひとが経験している状態ではないだろうか。

第3部 時間と自己—結論

「精神病という事態は、多くの身体疾患とは違って、われわれのだれもが持っているそれ自体異常でも何でもない存在の意味方向が、種々の事情によって全体の均衡を破った極端に偏った事態にすぎない。」174 頁

「健全な人というのは、そのどれかの方向を際立たせることによっておのおのの個性を出しながら、潜在的にはそのすべての方向を生きる可能性を身に着けている人のこと」175 頁

私が私であること—言語の使用=言葉とはものを指示するだけでなく、「ことを表現しうる」
→ ことを表現することを通して、自己は自己たりうる、
言葉は意味を産出する、言葉によってことが生れ、自己が自己として存在するようになる。

ことは言葉で表現された瞬間に、物的な表象による汚染を被らざるをえない宿命にある。

「ことをものによって汚染することを通じてことを再生させる」176 頁

こととは「人間意識における自己のこと」176 頁

「カントは人間理性の有限性を、その認識が対象によって感性的に触発されなければ成立しない点に見出した」177 頁

人間は感性の受容なくして対象を産出することができない

「人間の有限な認識は、対象から受容的に触発されることを通じてでなければ、対象を産出することができない」177 頁

感性の受容性と悟性の自発性の統一による認識が、超拙論的構想力—カント

ハイデガーは「この超越論的構想力の内に、ほかならぬ時間の源泉を見出した」177 頁
ハイデガーにとって、時間とは「自己が自己自身にかかわる」ということを可能ならしめるものである。神のごとき無限の存在にとっては、自己であるということがなんらの媒介も必要とせずそのまま自己自身と合致しているのであろう。しかし人間の有限な自己にとっては、自己が自己でありうるためには、自己は自己自身とかかわらねばならず、自己自身によって触発されなくてはならない。」

「時間の本質は、経験に先立つ純粋な自己触発にある」177 頁

「純粋自己触発としての時間が主観性の本質構造を形成する」ハイデガー

「人間の意識は、ものに触発され、ものに汚染された形でしかことを意識することができない」178 頁

中野裕孝『カントの自己触発論』東京大学出版会、2021 年

「自発性と受容性が二つの区別された事物に属するのではないということは、それらがただ一つの作用の二つの異なる側面だからである」

「悟性も内的感官も、一方が他方から数的に分離されることはありえないのであって、むしろともに一つの触発作用をなしている」68 頁

磁石の S 極と N 極の関係のようなもの

「N 極と S 極は、数的に区別される二つの事物に属するのではなく、ただ一つの磁力の分離されざる両側面としてしかありえない」69 頁

「人間がことの自己実現の媒体としての言葉を有するということと、人間が自己自身を意識しているということ」は同じこと

提起される問い

自己が自己たりうる媒介としての時間が、自己の豊かな広がりを喪失するところから、分裂症、躁鬱症が生ずるのだとすると、時間が自己の媒介から解き放たれて、自己を拘束する監獄のようになる現代人はどのように自己形成を成し遂げることができるのだろうか、

この問題をポール・ヴィリリオ、ヘルトムート・ローザの時間論を通してつぎに考えてみたい。